# Wakayama University Tourism Update

Semiannual Newsletter of Tourism Education & Practice

WTU　Autumn/Winter 2023

Connecting
Local Communities
Exploring
the World
Sharing
Experiences
Academic
Skills

## Contents　ー目次ー

1. Reports　ー和歌山大学観光学部生の国際 / 地域活動報告ー
2. Topics　ー過去のイベントとニュースー
3. Future Events　ー今後のイベント紹介ー

Support Office for Tourism Education and Practice, Faculty of Tourism, Wakayama University

## ■「タイ旅プロジェクト」を通し考えたこと

仙波　結さん（15 期生／愛媛大学附属高等学校出身）

私は和歌山大学観光学部に入学し、様々な課外活動に参加し視野を広げてきました。その中でも、世界のことを知り、日本の観光について活かすことができることはないかと思い、「ＰＡＴＡ和歌山大学学生支部」に加入しました。今回、タイ国政府観光庁大阪事務所、和歌山県観光交流課、和歌山大学観光学部、PATA 和歌山大学学生支部が主催となって「タイ旅プロジェクト」を実施することになりました。観光学部生が与えられたテーマに沿って、タイ国内での旅行プランを作成し、班ごとにプレゼンテーションするというコンペ企画です。この企画に関わったことで、PATA 学生支部に加入した時の想いが実現でき、良い経験になりました。

まず準備段階で、班の仲間と共に意見交換を行いました。最初はタイのことを全く知りませんでしたが、情報交換をする中で観光地からローカルフード、文化まで学ぶことができました。現地ツアーを作成する際には、目的地を移動しやすい道順になっているか確かめることや、原価から利益をあげることができる料金設定なども考えて計画しました。中でも、一番私たちの班が気を付けたことは、ツアーに一貫性を持たせることです。テーマを定めてターゲットに合わせた内容にすることで、ツアー客が本当に喜ぶものを提供でき、人気のツアーになると考えました。そしてテーマを踏まえ、タイならではの文化などを掛け合わせることで、もう一度タイに行きたいと思ってもらえるようなツアーにすることができると考えました。

実際に、自分たちのプランを発表する際に学んだことは、発表は楽しんだもの勝ちで、何度も練習して中身を研鑽することも大事ですが、発表する時の自分はこのプランが好きというような心の持ちようが伝わるようなプレゼンであれば、聞く人の心を動かすことができるということです。自信を持って楽しく発表することが重要だと学びました。タイ国政府観光庁、旅行会社、県庁観光交流課の方々からのご意見もいただくことができ、今回習得したスキルや知識をこれからに役立てたいです。

観光学部では自分が望めば様々な体験ができます。新しいことに挑戦できる雰囲気と体制があり、自ら動いたら自然と人が集まってきます。行動して失敗することもあるけれど、経験して学ぶことは多くあると実感しています。私自身が課外活動団体に６つ所属しており、忙しくて投げ出したい時もありますが、充実した学生生活を送ることができています。その中でも、PATA 学生支部ではいろんな活動に参加でき、今回のタイ旅プロジェクトのような観光プランの作成、企業訪問、講演会運営や学生同士の勉強会での意見交流などで知識を深めることができます。自分の興味あることにどんどん挑戦していき、知識をつけて、これからもその道を歩み続けたいです。

観光学部 HP 掲載ニュース記事
https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2023062900048/
https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2023052400077/

## ■ タイ・チェンマイで見つけたサステナブルな旅のアイディア
## ～タイ国政府観光庁主催「SDGs FAM Trip in Chiang Mai 2023」研修旅行

井上　菜緒さん（15 期生／広島県立広島皆実高校出身）

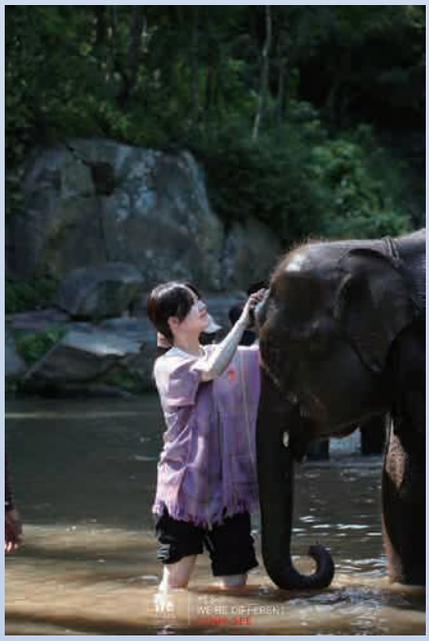
９月１日～９月６日にかけて、タイ第二の都市、チェンマイにて行われた FAM トリップに参加してきました。「FAM トリップ」とは、観光地の誘致促進のため、ターゲットとする国の旅行事業者やメディア関係者などに現地を視察してもらうツアーのことです。私は、６月に和歌山大学で開催された「タイ旅プロジェクト」に参加し、「サステナブル」をテーマにタイ国内の旅行プランを作成して発表したことがきっかけとなり、観光を学ぶ学生として、他の関係者の皆様と共に、タイ政府観光庁が企画した FAM トリップに参加させていただくことになりました。４泊６日という短い期間ではありましたが、タイ国政府観光庁大阪事務所様のご案内のもと、古都としても知られるチェンマイの魅力を十分に堪能することができたほか、観光とサステナブルの関係性についても再考する良い機会となりました。

チェンマイに到着してまず訪れたのは、今回の旅の拠点でもある「メリア チェンマイ」というホテルです。メリアはスペイン発のホテルブランドですが、タイの伝統・文化へのリスペクトが各所にしっかりと見られたことが印象的です。ホテルインスペクションにてスパルームのデザインがチェンマイにある寺院をイメージしていることを学んだ数日後、モデルとなった寺院を実際に訪れた時にはとても感動しました。室内にプラスチック製のものはほとんど見られなかったり、用意されている飲料水も詰め替え可能なビンが使用されていたりと、宿泊しながらサステナブルな気づきが得られる場所でした。

食の面では、地域の食材や伝統料理を様々な場所で楽しみました。地元で愛されるレストランに加えて、自社のオーガニックファームで育てた食材を使った料理を提供するレストランや、ミルク以外タイ産の原料を使用しているチョコレートブランドなど、比較的新しい世代も食のサステナビリティについて考え、行動を起こしていると感じました。

旅程の中でも強く印象に残っているのが、パタラ・エレファントファームでの体験です。象たちのケアを体験する前に、職員の方に象の生態やコミュニケーションの取り方など、十分に時間を取って説明していただきました。突然ですが、象の背中に乗ることは良くないことである、と聞いたことがある方はいないでしょうか？職員さんは、必ずしもそうではないと言います。象のケアを通して、対等な関係のパートナーとして触れ合うことが大切であると語ってくれました。今回の体験は、地元の方と話すことで自分の考え方をアップデートするきっかけにもなりました。

今回の FAM トリップでは、ここには書ききれないほど多くの体験と学びを得ることができました。タイの文化やサステナブルツーリズムという観点だけではなく、旅程の組み方やイレギュラーな状況への対応の仕方を間近で見て学ぶことができたという点も、観光学を学ぶ学生として有意義であったと感じています。改めて、今回は貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



## ■ 白良浜等海水浴場における実地研修について
## ～地域連携プログラム（LPP）：白良浜他海水浴場における集客力アップ及び顧客ニーズにあったサービスの企画開発（和歌山県白浜町）

中川　結介さん（16 期生／北海道釧路湖陵高等学校出身）

私たち白浜 LPP は、和歌山県白浜町にある海水浴場の将来的な集客力アップや顧客ニーズに合ったサービスの提供に向けて、( 一社 ) 南紀白浜観光協会の方々と連携して活動しています。白浜町には白良浜という白い砂浜や綺麗な海でかなり人気のある海水浴場があり、多くの観光客が訪れ、にぎわっています。しかし、その数は新型コロナウイルスの影響を受ける前から減少の傾向にあり、南紀白浜観光協会が例年実施している露店の売り上げも大きく減少しています。また、白良浜の近くには江津良海水浴場、臨海浦海水浴場という海水浴場もあり、そちらの海水浴場を訪れる観光客のニーズも調査を行い、そして今後の集客やそこで実際に観光客がどのような環境やサービスを求めているのかを知ることで、来シーズンのサービス改善に反映させるべく、活動しています。

私たちは、観光協会が露店で行っているパラソルなどの貸出業務、軽食の販売業務などの体験や海水浴場を訪れた観光客を対象にしたアンケート調査を実施しました。7 月 21 日～ 24 日、28 日～ 31 日、8 月 18 日～ 21 日の 3 つのグループに分かれ、実地研修を行いました。

実地研修では 3 グループ合計で 450 名ほどの方からアンケートにご協力いただき、様々な方とコミュニケーションを取ることができました。研修全体を通して、学生の間で様々な意見や感想がありました。ほとんど全員が持った感想として、大阪のほうから自家用車で訪れる観光客が非常に多かったということが挙げられました。白良浜周辺は大きな駐車場があまりないため、駐車場を増やしてほしいという声や、駐車料金を安くしてほしいなどといった駐車場に関する不満が多くあり

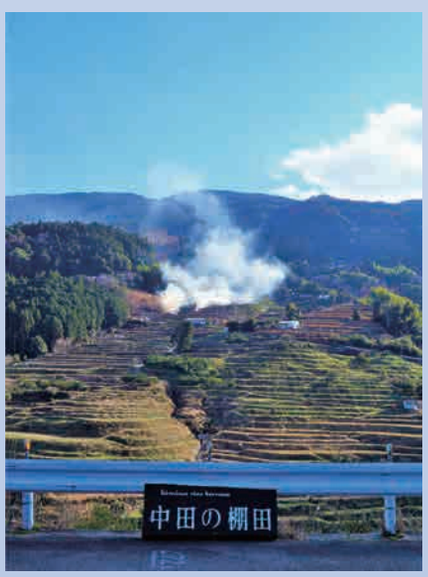
（次ページへつづく）

ました。また、白浜の海水浴場は自然に頼り切っており、サービス面が不十分になっているという点も挙げられました。観光客からはインスタ映えするメニューを販売してほしい、海の家がほしい、などといった声が多くあり、改善の余地が十分にあると感じました。一方、観光客の方と直接コミュニケーションをとることで、訪れた目的や期待しているものなどが理解しやすく、アンケートだけでは伝わらない情報も聞くことができ、有意義な時間になったと感じています。

白浜 LPP では今後、アンケートで得た観光客の方の意見をもとに、来シーズンの白浜の海水浴場のサービス向上に向けて企画の立案を行う予定です。来年度の夏、私たちが考えた企画を実現できるよう、これからも活動していきます。

## ■ 棚田の再生に貢献するために私たちができること
## ～地域連携プログラム（LPP）：地区 × 学生による観光・文化・交流情報発信と棚田の再生（小川地区）（和歌山県紀美野町）

月岡　春翔さん（16 期生／愛媛県立今治西高等学校出身）



私たち紀美野町小川 LPP は和歌山県紀美野町小川地区にある「中田の棚田再生プロジェクト」に参加し、地域住民の方々と共に、棚田の保全・活用に向けた活動を進めています。このプロジェクトでは、町内外から中田の棚田で活動を行う「棚田サポーターズ（通称；棚サポ）」のボランティアの方々と一緒に田植えや草刈りなどの棚田の維持・再生活動に加えて、ワークショップやイベントの開催など中田の棚田再生に関わる様々な活動を行っています。これまで、私たちは作業を通して地域の方々および再生プロジェクト参加者らとの関係構築に努めてきました。昨年の後半からは、中田の棚田での活動・交流を通して、見えてきた地域の課題に対して学生ができることを検討し、課題解決に向けた活動や調査を実践してきました。

まず初めに行った活動が、棚田のビューポイントに手作りの看板を設置することです。以前、中田の棚田のビューポイントには何も目印がありませんでした。そこで、地元の木材を使用してオリジナルの看板を作り、ビューポイントの雰囲気を守りながら、ただの棚田ではなく、「中田の棚田」として、観光客に認知してもらえるようにしました。地域の方々からは「看板のおかげで、ビューポイントで立ち止まってくれる人が増えた」と言っていただけました。

そして、今年度からはより主体的かつ、学術的に活動を行うため、私たちは二つの活動部門を設けました。一つは「活動 PR 部門」です。SNS などを活用して棚田の活動をプロモーションし、その効果を測定して観光地の PR の方法を学んでいきます。もう一方は「調査・研究部門」です。地域でのフィールドワークを通して、棚サポメンバーに「どのように、中田の再生プロジェクトに参加するようになったのか」や「中田の棚田で活動をする理由」について聞き取り調査を行い、人々が棚田に集まるメカニズムを解明することを目的とします。

各部門は活動を行う前に、学術書や論文など関連文献を読み込み、そこから学んだことを実際に地域に出て実践することで、より質の高い活動内容にしていきたいと考えています。また、今後、学術的な知見や理論と実践の往復をすることで、座学での学びを地域での活動を通してより深めていきたいと考えています。そして、意見交換や調査結果の発表を通して、地域の方々が新たな気づきを獲得し、今後の中田の再生プロジェクトがより良い方向に進んでいけるよう積極的に活動していきたいです。

関連 URL
中田の棚田再生プロジェクト　https://kiminoriceterrace.com/

## ■ Global Intensive Project（GIP） - Global Learning Advanced：
## ～ Leadership and Management in the Hospitality Industry（College of the Desert（アメリカ・カリフォルニア州））

井口　実南さん（15 期生／近畿大学附属和歌山高等学校出身）

2023 年 4 月 10 日から 6 月 30 日までの約 2 ヶ月、週一回でオンライン開講された COD-GIP を受講しました。本コースはアメリカのカルフォルニア州にある College of the Desert との連携 GIP で、アメリカにいる現地学生と共に、Leadership and Management in the Hospitality Industry の授業を受けました。

授業内容は、授業名にもある通り、ホテルや飲食店などホスピタリティが求められる職場でのリーダーシップの取り方について考えるものでした。アメリカの現地学生の中には、フルタイムで仕事をしながら大学の授業を受けている、いわゆる社会人学生も多く在籍していた為、授業で習ったリーダーシップ論がどのように現場で使えるのかをディスカッションしたり、彼らの職場での実体験を教えてもらったりする機会も多くありました。授業担当の Yolanda Bender 先生の専門がホスピタリティ・マネージメントなので、和歌山大学の観光学部で学ぶ観光業におけるホスピタリティとは少し異なった視点からのリーダーシップ論を考えることができました。

さらにこの GIP を通じて、アメリカの大学の授業のスピード感や進め方、雰囲気を実際に体験することができました。先生が説明している間ですら手を挙げて質問したり、実体験を話し始めたりするなど、現地学生の授業への積極的な参加姿勢が、日本とは異なっていて非常に印象的でした。私を含め、日本人学生のほとんどが最初は緊張で萎縮してしまっていました。しかし、現地学生の勢いのある授業態度に感銘を受け、後半は積極的に手を挙げて質問したり、意見を発表したりできるようになっていました。また授業中のディスカッションやグループ発表では、先生や現地学生の「ネイティブスピーカーが話す英語」の速さを身を持って体験しながら、様々な国から集まったクラスメイト達の異なる意見を聞けるだけでなく、自分の意見を英語で発表して理解してもらえる貴重な場になりました。

授業後には毎週 30 ページほどのリーディングと、授業内容やリーディングに対するコメント、他の学生が書いたコメントへのフィードバックが課題として出されていました。この課題の量の多さも日本の大学との相違点だと思いました。リーディグの量が多くて毎回大変でしたが、授業内容の復習になりましたし、なにより読む力が鍛えられました。

約 2 か月のオンライン授業の後、College of the Desert の先生と学生が実際に日本に来て和歌山大学を訪問し、私たちと一緒に永井先生の「日本における観光の現状」についての講義を受けました。その後、高野山の宿坊宿泊体験や週末には京都観光も行いました。私たち日本人学生が観光プランを立てたので、初めて日本を訪れる彼らに日本の文化や観光地を紹介する準備をしました。これは私にとって受け入れ側、つまりホストになる初めての体験でした。

COD-GIP はアメリカの大学の授業に実際に参加する GIP ということもあり、初めは大変緊張しましたが、後半では慣れて、楽しみながら受講できる様になりました。このコースのおかげで英語の実力が顕著に伸びたとは言えませんが、授業中に意見を積極的に述べたり、学術的な英語を使ったりすることに対する度胸が鍛えられました。この学びを基礎に、和歌山大学で受ける他の GP 授業にもより意欲的に参加し、すべての学びに能動的であり続けたいと思います。

## ■ Global Intensive Project（GIP） - Global Learning Activity：
## ～ Communication Skills for Global Citizenship (Faculty of Education, University of Alberta, CANADA)

西村　颯一郎さん（15 期生／ AICJ 高等学校（広島県）出身）

はじめに、2022 年度のカナダ GIP は、3 回生 4 名、2 回生 3 名の 7 名が参加し、約 3 年ぶりの現地実習プログラムとなりました。また以前は夏に実施されていたこのプログラムが、今年度は冬の終わりの 3 月に実施されました。これは観光学部としても初の試みで、実際現地に降り立つと－20℃という耐え難く寒い環境と直面することになりました。私は高校時代にも一度カナダを訪れたことがありますが、冬の経験はなかっ

（次ページへつづく）

たのでとても心配していました。しかし嬉しいことに、ホストファミリーや現地スタッフの方々の心の温かさに触れることができ、とても充実した１ヶ月を過ごすことができました。本プログラムに関わっていただいたみなさま、本当にありがとうございました。

アルバータ大学提供のプログラムである本 GIP は、カナダ・アルバータ州の州都エドモントンにあるアルバータ大学のキャンパスで行われました。平日は 8:30-12:30 までの 4 時間の授業があり、１週目は日本とカナダの違い、ホームステイのアドバイスや食文化などの身近な問題について、２週目は先住民族や移民の文化について、３週目は持続可能性について学び、最終週はカナダ１３個の州・準州を紹介するプレゼンテーションを作成しました。文法や語彙だけでなく異文化理解やコミュニケーションに重点が置かれ、グループ・個人でポスターや動画、プレゼンテーション、ある時にはミニトークのシナリオを作成し、ほとんど毎日、何かしらの発表をしました。座学だけでない学生主体の授業は、日本で経験することが少なかったのでとても興味深く、とても楽しみながら授業を受けることができました。私が特に印象に残っている授業は、先住民族”Indigenous/First Nations”の授業です。カナダは多くの先住民族が暮らしており、植民地化や不平等などの暗い歴史を持ちながらも、彼らの言語や文化、精神的な世界観は今も受け継がれ、尊重されています。歴史に思いを馳せ、エンパシーの意識を身につけたことで、日本では経験できないほどに自分を見つめ直すことができました。

午後には Conversation Club（英会話）やアクティビティがありました。暖かい日にはエドモントンのダウンタウンを周遊したり、大学の施設で本格的なクライミングを楽しんだりしました。他にもカーリングの体験や、アルバータ大学の大学生と交流するなど、多くのアクティビティがほぼ毎日あったことで、四週間という短い期間をとても有意義に過ごすことができました。

ホームステイでも、日本では経験できないことをたくさん経験することができました。日本では当たり前のことが通用しない上、振る舞いに気をつけなければ失礼になるかもしれない、と考え込みすぎて最初の一週間はホームステイ先で落ち着くことができませんでした。ところが、食事に慣れてホストファミリーと打ち解けていくうちにストレスを感じなくなり、日本に帰る頃には、この楽しかった生活が終わってしまうのかと寂しさを感じるようになっていました。

英語で自信を持ってコミュニケーションできる力をつけられたことに加え、カナダの気候や人の温かさ、多様性を認め合い尊重する文化は、自らの固定観念を改め、グローバルな視点を身につけることができる最高の環境でした。このプログラムで得た数多くの経験を活かして、今後も世界中の様々な人々と交流をしていきたいと思います。

## Topics　－過去のイベントとニュース－

### ■「GP WEEK 2023」を実施しました

観光学部のカリキュラムの一貫として実施している「Global Program (GP2.0)」。

プレエントリーを目指す 1 年生へのプログラム紹介の機会として、またプレエントリー／エントリーしている 2・3 年生との交流の機会として、2023 年 6 月 19 日～ 23 日の毎日お昼休みに「GP WEEK 2023」を実施しました。

このイベントは GP2.0 にエントリーしている 3 年生有志が企画・運営し、GP2.0 の制度紹介のほか、2 年生による学習体験のプレゼンや、先輩による相談会などが行われました。

GP の先輩・後輩たちと話しながら、GP コミュニティーを体験できるチャンスとして、延べ 56 名の学生が参加しました。

## ■ 2023 年度秋派遣 交換留学に出発！

コロナ禍の制限もなくなり、交換留学や GIP などの海外派遣プログラムが再開されています。

2023 年度秋派遣（7 ～ 9 月出発）の交換留学プログラム（全学、学部）に、計 6 名の本学部学生が参加しています。それぞれにとって、この半年～ 1 年間が、有意義な留学期間となることを期待しています！

【全学プログラムによる交換留学】

・ブリッジウォーター州立大学（アメリカ）　・カーティン大学（オーストラリア）　・セントラル・ランカシャー大学（イギリス）

【観光学部独自の交換留学プログラム（エラスムス・プラス奨学金）】

・ヴェルン大学（クロアチア）

関連 URL

留学に興味がある日本人学生の皆さまへ（日本学教育研究センター）https://www.wakayama-u.ac.jp/cjs/japanese/

エラスムスプラス交換留学プログラム（クロアチア）（観光学部 HP）　https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2023040600014/

ブリッジウォーター州立大学
阪辺　智春さん（15 期生）
瀬底　花さん（15 期生）

カーティン大学
木村　羽瑠さん（15 期生）

セントラル・ランカシャー大学
小木　岳斗さん（15 期生）

ヴェルン大学
野口　芽生さん（15 期生）
東　千尋さん（15 期生）

# Future Events　－今後のイベント紹介－

## ■「LPP 参加学生交流会 2023」を実施します！（学部内限定）

観光学部 地域連携プログラム（LPP）に参加している学生を対象とした交流会を実施します。

本交流会では、LPP での学びの共有と発展を目的として、LPP に関わる 6 つのテーマについてグループディスカッションを行います。

2023 年度後半の活動が始まる前に、この半年間までの活動の振り返りや、今後の活動、地域との関わりについて、プログラムの垣根を越えて考えてみましょう。

■ 日時：2023 年 10 月 10 日（火）、11 日（水）　いずれも 16:40 ～ 17:50 頃
■ 会場：和歌山大学 西 4 号館 T-101 教室
■ 当日のディスカッションテーマ（予定）
①各 LPP の会議の取り組み方について
②地域や学生、学生同士、担当教員とのコミュニケーション、連絡の取り方について
③LPP でのこの半年間の学び、気づき、参加して役立ったことについて
④どのような地域づくりを目指して活動しているか
⑤学生のモチベーションについて（モチベーションを保つための工夫など）
⑥地域との関わりの中で意識していること

## ■「2023 年度 和歌山大学『観光・地域づくり』講座 @Zoom」のご案内

本講座は、観光地や観光ビジネスにおいて高く評価されているキーパーソンを講師に招へいします。各方面で活躍されている方々のユニークな着眼点やリーダーシップを発揮しての事業の推進、異業種を巻き込んでのコンセンサスの形成方法など、さまざまな観点からの実践事例を拝聴するなかで、和歌山県をはじめとする地域の観光振興とまちづくりの方向性を探ります。

なお、本講座は 2008 年度から 2019 年度まで開講してまいりました「観光カリスマ講座」を受け継ぎ、2020 年度より「和歌山大学『観光・地域づくり』講座」として開講しています。また、本講座は観光庁「中核人材育成講座」公認プログラムです。

2023 年度は、昨年度までと同様、Zoom のウェビナー機能を利用したオンライン公開講座（ライブ配信）となっています。各回開始 1 時間前まで申し込みを受け付けております（ただし、定員に達し次第受付を終了します）。

皆さまの聴講をお待ちしております。

➔ プログラムや参加申込方法などは、観光学部 HP 掲載ニュース記事をご覧ください。
観光学部 HP　https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2023090500029/

## ■ 世界最大級の旅の祭典「ツーリズム EXPO ジャパン 2023 大阪・関西」に出展します！

世界の観光・ツーリズムをリードする総合観光イベント「ツーリズム EXPO ジャパン 2023」が、4 年ぶりに大阪（会場：インテックス大阪）で開催されます。

このイベントに、2019 年・2022 年と引き続き、和歌山大学観光学部が「アカデミーコーナー」に出展し、学部・大学院の教育・研究活動などを紹介します。

また、本学部の加藤久美教授の研究室も「観光 SDGs コーナー」に「サステナビリティ研究室」として出展し、国際基準に沿って観光庁が開発した「持続可能な観光ガイドライン (JSTS-D)」（地域版）のオンライン・ベンチマーキングツール STARs (https://sustourism.net ) の活用やサステナビリティへの多様なアプローチなどを紹介します。

是非、「国立大学法人和歌山大学　観光学部」「サステナビリティ研究室」の各ブースにお立ち寄りください。お待ちしております。

■会期：2023 年 10 月 28 日（土）・10 月 29 日（日）
※10 月 26 日（木）・10 月 27 日（金）は業界日のため、一般の方は入場できません。
■会場：インテックス大阪
■公式サイト：https://www.t-expo.jp/

➔ 出展者ページはこちら
国立大学法人和歌山大学　観光学部　https://www2.t-expo.jp/exhibitors/view/ja/45258/BtoC
サステナビリティ研究室　https://www2.t-expo.jp/exhibitors/view/ja/45257/BtoC

➔ 観光学部 HP 掲載ニュース記事
https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2023092800028/
https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/news/2023092800035/

編集・発行　（2023 年 10 月発行）
和歌山大学 観光学部 観光実践教育サポートオフィス
〒640-8510　和歌山市栄谷 930　和歌山大学西 4 号館 K216 室、K116 室
TEL　073-457-8553　／　E-mail　tourism-er@ml.wakayama-u.ac.jp　／　URL　https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/
＊本誌は Web ページからも閲覧できます→https://www.wakayama-u.ac.jp/tourism/fuzoku/tourism-education-research/wtu.html